

俺の創造主は 分かっていない!

作 メンヘライⅢ

illust あすら



マ
キ
ナ
さ
ま
俺の創造主は分かっていない！

メンヘライⅢ

プロローグ エンディングに至らない主人公

私は私の世界に認知されない。

その事実をもどかしく思いつつ今日も、私は物語を紡ぎ、観測し続けている。

「ねえ、主代くん……一緒に帰らない？」

「え……？ け、けど一色さん、彼氏の遊佐がいるだろ？」

放課後の喧騒の中、かき消えてしまいそうな声で主代公人は囁いた。話題の人、遊佐波戯はすでに教室にはいない。ほっと一息ついたのも束の間、一色香織が公人の鼻っ柱を細い指先でツンツンしてくる。「もう……主代君は真面目だなあ」

「い、いや、だってほら、俺だって面倒事とかゴメンだし。遊佐に目をつけられたら俺……」
「女の子の前でそんな情けないこと言わないの」

今度はコッソ、と額を拳で軽く小突かれる。女子にしては身長の高い香織と、男子にしては身長が低い公人。何を隠そう、公人はこの一色香織という同級生が苦手だった。

「……それにさ。ナギのことなら心配いらないわ。あいつ、今日は甘菜に付きっ切りだから」
そう言つて、香織はわざとらしく笑った。「あーあ、馬鹿馬鹿しいよね。だからアタシも浮気

してやるんだ。これから。主代クンと」

今度は悪戯っぽい笑みを作り、香織が腕を絡めてくる。香水の匂いだろうか。甘い香りに脳がクラクラしそうになるのを我慢しながら、それでも震える声を絞り出した。

「ゆ、遊佐は広井ひろいさんにちよっかい出してるのか……!？」

広井かんな甘菜。

つい先日の一学期中間テストの総合成績はクラス三位で委員長。誰とも気さくに話せる性格も相まって、男女問わず人気がある美少女だ。少し勉強ができるだけでクラス内でも目立たない公人にとっては完全な「高嶺の花」ではあるが、公人は一年生の頃から、甘菜のことが気になっている。何せ、甘菜は友人のいない公人にも優しく、話しかけてくれるのだ。

「ふくん……やっぱり主代クンは甘菜みたいな子がタイプだったんだね」

「……え？」

香織が再び悪戯っぽい笑みを浮かべている。「あ、いや、そういうわけじゃ」「いやいや、別に誰にも言わないしいいよ」「いや、だからそんなんじや……」「はいはい声裏返ってる」

クスクスと笑ったまま香織は公人に腕を絡めて歩き出す。地味な公人と派手な香織の組み合わせの物珍しさに、教室に残っていた生徒たちの注目が集められる。

「お、おい、これじゃ遊佐に……!」

ようやく、自分の置かれた状況に危機感を抱いた公人は慌て始める。「あんっ……、主代クン

つてば意外と強引」と、わざとらしく嬌声をあげる香織を引きずるようにして、公人は廊下を駆け抜けた。人の少ない三階と二階の間の踊り場でようやく、足を止めて腕を引き抜く。「か、勘弁してくれ！　そ、それに広井さんって……」

「フフツ。だって主代くん、リアクションがいちいち可愛いんだもん」

「か、可愛い男とか目指してない……」

「いいのいいの。アタシは可愛い男の子、好きだし」

「……うるさい」

「あはは、ごめんごめん」

まったく悪びれた様子もなく、香織は階段を降り始める。公人は少し迷った後、その後続いた。

「甘菜は大丈夫よ。あの子、あれで結構人に踏み込まれるの、嫌ってるから」

「ひ、広井さんとそんなに仲いいのか？」

「うわっ、鼻息荒いわね！　カンナとは小学校の時から同じだから、それなりに分かるのよ」

「……」

考えてみれば、香織のことも甘菜のことも、公人はあまり知らない。少し距離を保ちながらも香織と歩く公人は考える。香織はともかく、こんなことでは甘菜と仲良くなれるはずがない。そう、香織ですら知ってる甘菜の情報を、公人は知らないのだから。

「そんなことよりさあ」

氣付けばまた、香織がニヤけた笑みを浮かべていた。「主代くんさ、夜は誰をオカズにしてるの？ やっぱり甘菜」

「……ダメね。無理やり組んでみたけど、やっぱりこの女では私のシモベを導けない」

青い光に満ちた室内で、私はため息を吐いた。たった今自分が打ち出した文字列の並ぶ巨大なモニターを見下ろすと、室内を満たす青い輝きが私の目を焼く。これが、私の世界。虚構の物語を紡ぎ、観測する仕事部屋だ。でも、私が干渉しても全くこの物語は好転しない。

「……お爺ちゃんに怒られるから、今日の分は最後まで終わらせないといけないわね」
ため息を吐いて、私は文字列を再び紡ぎ始める。そう、今日はこれでおしまい。

でも、私は時々不安になる。この部屋に満ちた輝きのように、主代公人という「主人公の少年」を世界の中心として輝かせる方法。それが、どうしても私には分からないのだから。いっそ、彼らが私のために自発的に幸せになってくれたらいいのに。そう考えることも多い。

……私は私の世界に認知されない。

その事実をもどかしく思いつつ今日も、こうして一日の観測が終わった。

きっとこの気持ちは、観測者として、そして創造主としてふさわしくないものなのだろう。だからやっぱり、私は創造主として「分かっている」。

起
ぼっち主人公・フラグ・マンホールから美少女の超展開

最後には主人公がヒロインを幸せにする。

そんな王道展開のギャルゲーを、俺は好んでよくプレイする。

ギャルゲーをやって思うのは、創作者の偉大さだ。

それは別にギャルゲーだけに限らない。小説、漫画、ドラマ、アニメ、映画……。フィクションの作品の数だけ、「世界」が存在して、その箱庭の中で登場人物たちは物語を展開する。その「世界」をコントロールする作者の力量に、俺はいつも驚嘆せずにはいられない。

「それに引き換え……」

そして、次に思うのは現実の退屈さだ。

今、サブヒロインであるルナちゃんのルートをクリアしたこの『隕石少女流星群』メテオガールズ・ストライクと違って、空から美少女は降ってこない。可愛い幼馴染もない。義理の妹もできない。『メテスト』の主人公と違って、俺はそれなりに学業方面で努力はしているし、結果も残している。何せ、四十人いる我が教室の中で総合成績が四位なのだ。一応進学校に分類される我が校の特進コースにおいてこの成績なのだから、俺は十分優等生の部類に入るだろう。そう、努力はしているのだ、俺の場合。

……それなのに、学校で彼女どころか友達だつてまともにもいない。今日だつて一色香織ビッチに絡まれたのと四時間目の世界史で先生に指名され、「二二九九年」と答えたの以外、発言してないほどだ。ちなみに一色香織に絡まれた直後は、彼女の彼氏である遊佐波戯なぎに「人の女に手を出してんじゃねえよ。クソ童貞が」と肩パンされるオチ付きである。クソ童貞に自分のビッチが手を出さないように、ヤリチン諸氏にはしつかり手綱を握つていてほしいものだ。

まあそんなわけで、俺はモテない目立たない楽しくないと三拍子そろつた学園生活を今日も送っている。ふざけんな。

しかし俺はそこら辺の負け犬と一緒に遠吠えに終始するつもりはない。

くだいかもしれないが、何度だつて自分の美点はアピールする。特進コースのクラスにおいてなんとかかんとかクラス四位を保っている成績を見てもらえば分かる通り、俺は一人努力を続けることができる硬派な男なのだ。だから、昼休みは毎日愛しの広井さんを観察しながら自分の学園生活がうまくいかない理由を必死に考えた。

何故か。まず断つておくと、俺に非がないのは確定的だ。百人に訊けば百人が俺に同意するだろう。

だが、俺は普段人前では硬派を通す男だ。当然学校でそんな話をできる相手はいないから、俺は広井さんの表情の変化全てを脳裏に刻みながら、ひたすらに自問自答を重ね続けた。新年が始まって、突然新たなスクールカーズが成立しても我関せずを貫き通し、遊佐波戯に絡

まれても「ごめんなさいごめんなさい」と呪文を唱え続け、徐々に形成されたグループから順当に弾かれながらも焦ること無く、時に遊佐波戯から理不尽な暴力を浴びながらも俺は一人考え続けた。もちろん、広井さんの観察と並行して。

どうして。どうして俺の学園生活はこうも味気ないものなのか。

四月に答えが出ないのは高二病のせいだと考え、五月に答えが出ないのは五月病のせいだと言いつつ、六月も中旬に入って自分探しの旅に出ようかと考え始めた頃、ギャルゲーをしていた俺の脳内に、答えは天啓のように閃いた。

俺、つまり主代公人という、「ある冴えない男子高校生の物語」を創った奴が無能なのだ！

それは俺の両親とか、そういうレベルの話じゃない。

そうじゃなくって……俺を主人公とした物語があつて、その物語を創っている奴を仮に「神」と呼ぼう。

だが、その「神」は色々なことを良く分かっていなくて、きちんとした物語を創れない。この世界の物差しで言うなら、小説の新人賞に送って一次落ちするレベル。創作者としては無能もいいところだ。だから、俺の物語も面白くなく、主人公である俺がこんな鬱屈とした気分を毎日を浪費するかのように過ごしているのだ。

つまり、俺の物語を創った奴は分かっている！

もっと直接的に言い換えよう。どう考えても、俺は悪くない。

やったぜ。

……などと責任逃れをしたところで誰も幸せにならないことに気付いた。

なので俺はお気に入りのギャルゲー『メテスト』を今日もプレイしている。現実では空から美少女は降ってこないけど、ギャルゲーの世界では降ってくる。ならばこの虚しい世界で時間を浪費するよりも、ギャルゲーの世界で余暇を過ごす方が有意義に決まっている。この世界では、無為から何も生まれない。空から美少女が降ってくるなんて非日常への入り口は、存在しないのだ。

……大体、人と中途半端に関わるのは良くない。

俺のように魅力も地力も無い人間は特に。遊佐のようにチャラチャラした強引な男ならともかく、俺のように消極的で人の気持ちを汲み取るのが苦手な人間は特に――

『兄さん、電話だよ！ 電話が鳴ってるよ！ 兄さん――』

暗い気分に関われた俺を救うかのように、机の上のアンドロイドが甘い声と共に振動した。電話とEメールの着信を美少女義妹・カノちゃんが知らせてくれる神アプリだ。

だけど、残念ながらこの神アプリが電話の着信を知らせてくれるのは、母からの着信があった時以外に考えにくい。俺はパソコンの画面の中で泣きべそをかいてる、『メテスト』のメインヒロイン・アースちゃんと一時の別れを告げ、机の端に手を伸ばした。親からの着信ってどう

してこうも面倒な時にあるんだろう。

液晶画面を見ると、やはり母からだだった。わざわざフラグを立てておいたのに、母からだ。わざわざ前フリめいたフラグを立てておいたのに、やっぱり母からだ。全く、面白くない。

「……あー、もしもし」

『もしもし、公人。もう家？ お母さん今お仕事終わったんだけど』

「ああ、家にいる」

『あのね、今日お父さんご飯いらないんだけど、どうする？』

「俺は食べる」

『そう。実はお母さん今日ご飯作れないのよ』

じゃあ「どうする？」って訊くなよ……。俺も食わないと思っただのかよ……。

というツツコミはモノログに留めておく。「分かったよ。んじやなんか買ってくる」

『そう、ごめんね。お金は後で渡すから立て替えといて〜』

まったく悪びれた様子もなく、母は通話を切った。きつとお母さん合唱団の飲み会でもあるんだろう。気楽なものだ。俺はため息を吐き、『メテスト』のデータをセーブする。佳境に入ってから飯が手元にならないのは辛い。今日は早めに惣菜屋の弁当でも買って、冷めた飯を食べながら『メテスト』をやることにしよう。

画面内で泣きべそをかいてるアースちゃんを消すのは心が痛んだが仕方ない。パソコンをシ

ヤットダウンし、俺は着替えることもなく財布だけを持って一階に降り、玄関から外に出た。

あゝ、空から美少女降ってこねえかなあ……。もしくは広井さんが「来ちゃった☆」って押しかけ妻的に来訪してくれないかなあ。

そんな期待をしつつ門を開けた瞬間、「ゴゴゴ……」という重い音と共に違和感を抱いた。

なんだ今の音は？

それに、何か動かないはずのものが動いた気がする。俺は足を止め、まるで天敵を警戒する草食動物のごとく注意深く辺りを見渡した。「まだ六月」と言うべきか「もう六月」と言うべきなのか、梅雨前線の隙間を縫って顔を出した日差しが強くて、俺は思わず顔をしかめた。

ゴゴゴゴ……。

と、そこで俺は再び異音を捉えた。

今度のははっきりと聞こえた。俺の足元だ。視線を向けると、俺が毎日何気なく踏んづけていたマンホールがあった。いや……。。

「なんだこれ？」

よくみると、マンホールのふたが何故かわずかにずれている。なんだよこれ。危ないな。誰か業者の人が開いてそのままにしまったのか？俺は足でマンホールのふたを元に戻した。すると。

ゴゴゴゴゴゴ……。

再びマンホールのふたが勝手に動いた！　なんだよこのホラー現象！　俺はほとんど反射的にマンホールのふたを蹴り戻した。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

「ひえっ！」

すると前にも増して勢いよくずれるマンホールのふた。全身が本能的に危険を感じ取っていた。俺は必死にマンホールのふたを蹴り戻す。

「よし、ようやく収まったか……え？」

俺は安堵の息をついたところで、文字通り唾然と固まってしまった。クラス四位の成績を誇る俺に似合わぬ阿呆な顔だと思われるだろうが、こればかりは仕方ない。何故なら、マンホールのふたが唐突に跡形もなく消え、その下から現れたのが、

「ちよっとそこのモブ！　どうして私が出ようとすることを邪魔するのよ！」

まるでギャルゲーの世界から出てきたかのような、ロール髪の美少女だったのだから。



「……まあいいわ」

傾きかけた陽光に、ロールちゃん（仮）の金髪が眩しく輝く。

その金髪を小さく揺らし、大きく頷いたロールちゃんはしばらく辺りを見渡していたが、やがて意を決したように俺を見上げた。

「その無駄にプライド高そうな小者感……あんた、もしかして主代公人？」

少し冷静に考えれば名前を知られている時点でおかしな話だったが、ロールちゃんに見とれていた俺は当然気付かない。さらっと酷いことも言われた気がするが、それは意図的に聞き流した。身長は一五〇前後で小柄な方だろうか。年齢はそう俺と変わらないか、少し下くらい。全体的に慎ましやかな身体のラインとは裏腹に、勝ち気そうな吊り目が特徴的だ。

「……へえ。私のシモベのくせに主の問いを無視するつもり？」

そこで俺はようやく、ロールちゃんが怒っていることに気付いた。シモベ？ 果て、何のことやら。怒った顔も可愛いので正直このまま眺めていたかったが、女の子を怒らせ続けるのはよろしくない。やっぱり女の子は笑っている顔が一番だ。俺は毎日トイレの鏡で練習した必殺スマイルを浮かべて答えた。「ああ、俺は主代きm——」

「やっぱりね」

言い切る前にそっぽを向かれました。 「あとその笑顔、気持ち悪いわよ。修正が必要なレベルね」

「えっ？」

「どうして真顔で驚いてるのかしら……。ああ、けどこいつはそういうやつだったわね」

何故か頭を抱えるロールちゃん。お願いだ。そこから「きらっ☆」って感じで笑ってほしい。やっぱり女の子は笑ってる顔が一番可愛いと思うし、直前の表情とのギャップで笑顔が映えて、俺の心も「きらっ☆」しちゃうから！

「とりあえず、喉が渴いたわね」

当然だが、ロールちゃんは笑うことなどなかった。だけど、その後の行動は俺をそれ以上に驚かせた。何故ならロールちゃんは平然と俺の脇をすり抜け、たった今俺が開いた門の中、つまり主他家の敷地へ入ってきたのだ！

「ちよ、ちよ、ちよっと待てい！」

動揺のせいか思いっきり声がひっくり返ってしまった……。だけどロールちゃんは俺に見向きもせず、玄関のドアを引く。ガチャン。残念。俺は戸締りをきっちりする硬派な男だ。

「鍵」

「え？」

「か・ぎー」

扉の方を向いたまま小さな手だけを差し出してくるロールちゃん。それがあまりにナチュラな態度だったため危うく騙されるところだったけど、俺もさすがにそこまでチョロい男ではない。「い、いやいやいやいやいやいやいや、っつかお前誰だ！」

「シモベが生みの親に対して『お前』はないんじゃない？」

地雷を踏んだのは確かだった。

冷えた声音が突き刺さる。ロールちゃん、激おこぶんぶん丸怒りの全マシマシ。幼い顔して人を殺しそうな視線を送ってくるので俺は思わず謝った。「ごめん……」

「ふん……。とりあえず鍵渡しなさい」

「はい……」

俺はちよろかった。

……だが、鍵を渡した途端俺は考えた。硬派な俺が会って3分も経ってない女の子を家に上げるなど、キャラブレも甚だしい。カップ麺やウルトラマ○もビックリのちよろさだ。俺は威厳を取り戻すべく、コホンと咳ばらいをして扉の前に立ちはだかった。

「そもそも、君は誰なんだ」

「……『君』？」

「ロールちゃん、お名前を覚えてもらえる？」

「誰よロールちゃんって！ 消すわよ!」

物騒なロールちゃんである。

「……けれど、シモベが生みの親の名前も知らないのは確かに気の毒ね」

思い直したのかロールちゃん、俺から受け取った鍵を大人しく鍵穴に入れる。扉の前に立ちはだかった俺は完全スルーだ。

「あれ……開かないわね」

そりゃそうだ。

何故なら俺が渡したのは学校のロッカーの鍵であって、家の鍵ではない。だって、いくら美少女とはいえ、見知らぬ女の子を自宅に上げるほど俺は軟派な男ではない。ロールちゃんは諦めが悪い性格らしく、一分近く鍵をガチャガチャしていたがようやく諦めたのか、キツと俺を睨むように振り返った。「ちょっと、この鍵違うんじゃないの？」

「え？　そ、そんなはずないんだけどなあ」

「すっとぼけてんじゃないわよ。とにかくあたしは喉が渴いたの。早くあたしをもてなさない」

俺はロールちゃんの視線から逃れるかのように、扉から離れた。声が時々裏返ったりもつたりするのは、嘘をついているからじゃなくて、女の子と話す機会が普段少なすぎて緊張しているからだ。……言ってる悲しくなってくる。

俺が「あー」とか「うー」とか言いながら頭を掻いていると、ロールちゃんは唐突に背負っていたリュックを開き、中から紙とえらくオシャレな羽の装飾が付いたペンを取り出した。

「もういいわ。無駄なやり取りをシモベとするつもりはないの」

そう言って、主代家の扉の上で紙に何かを書くロールちゃん。ペンを走らせているのは見えるが、俺の位置からは書かれた文字までは見えない。あれは……日本語っぽいな。

「さ、あんたも中に入りなさい」

「あ、ありがとう」

文字を書き終えたらしいロールちゃんが扉に手をかけ、当たり前のように扉を開く。扉を開いたまま待っていてくれるロールちゃんにお礼を言って俺は玄関――

「ええええええええ！」

「うわっ!? いきなり大声出すんじゃないわよ！」

「い、いやいやいや、鍵！ ど、どうして鍵かけたままだったのにこの扉開いたんだよ!」

「そりゃこの扉、鍵がかかってないことにしたからに決まってるじゃない」

「いや、かかってたから。俺、確かに戸締りしたし、さっきは鍵必要だって言ったじゃん」

「ペンとメモを出すのが面倒だったのよ。……ところであんた、やつぱ本物の鍵を隠してたのね」

はい本日二回目の地雷踏みましたー！ 俺ってばうっかりさん！ 心の中でへへろしてみるけど当然実際にはそんなことしない。てへへろなんて硬派な男である俺がやったら、それこそ全国の読者の皆様から「キャラ崩壊も大概にしろ!」「作者迷走してるぞ!」「とりあえず作者チェンジ!」 絵師はそのままでもいいから」などと愛のあるお叱りの言葉が来てしまうからだ。

「はあ……」

俺をギラギラした視線で睨んでいたロールちゃんはやがて、くたびれたため息を吐きだした。

「……何度も言わさないで。喉が渴いたわ。冷たい麦茶を用意しなさい」

まるで勝手知ったる、とばかりにロールちゃんは我が家へ侵入する。どうしよう、これ警察呼んだ方がいいのだろうか。

「さあ、シモベ。早く私のために麦茶をつぎなさい」

いざ一〇番するとなると尻込みする。俺が玄関でまごついていると、弱々しい声が聞こえてきた。

「ああ、本当に……喉が渴いたわ」

彼女がついさつき漏らしたくたびれたため息が、不意にフラッシュバックした。

マンホールから突如現れた美少女。

そんな彼女に何かを期待するわけではないが、彼女をこのまま追い出すのはあまりに気の毒ではないだろうか。喉が渴いた女の子に、茶の一杯も恵んでやらないというのは、あまりに心が狭いのではないだろうか。何より、このままこのロールちゃんを追い返したら、彼女は俺の無為を怒るか悲しむだろう。そう考えると、俺は手にしたアンドロイドをポケットにしまった。何もしないで、女の子を悲しませる。それは、悪い男のすることだ。

「もう、何してるの！ 私が喉を渴かせてるんだから、早くしなさいよ」

……いや、やっぱり追い出していいのではないだろうか。

リビングに入るなり睨みあげてきた少女を見て、心底そう思った。しかも椅子ではなくテー

ブルにお行儀悪く腰かけている。

とはいえ、彼女とて喉さえ潤えばここには用はないだろう。ここは現実であつて虚構世界ではない。気になる言動が多いが、こんな美少女が冴えない俺に用などあるわけがない。「キンツキンに冷えた麦茶を入れなさい」と要求するロールちゃんに、俺は肩を竦めた。「う、うち、麦茶じゃなくてルイボステイなんですけど……」

「大丈夫よ。麦茶が冷蔵庫の中でキンツキンに冷えてるわ」

何故か自信満々に薄い胸を張るロールちゃん。いやそんな馬鹿な。だって朝牛乳飲んだ時は早朝に母が入れたらしいルイボステイしか……!?

「おいおい、なんだよこれ……」

俺は思わず声を漏らした。何故か「麦茶」が何本も冷蔵庫に入つてて、しかもキンツキンに冷えている。

「何ボケつとしてるのよ。ぬるくなつちやうでしょ」

俺が麦茶を手にしたまま茫然としていたら、目ざとくその様子に気付いたロールちゃんが声をかけてくる。今日はホラー現象多すぎだろ……。まるで夢の中でさまようみたいいな気持ちのまま、麦茶をコップに注ぐと、ロールちゃんがじれったい、とばかりに近づいてきた。「ご苦労もらうわよ」

コク、コク、と白い喉が鳴る。

透き通るように白く、すぐに折れてしまいそうな細い首だ。

俺が思わずロールちゃんの喉元に見とれていると、彼女はふう、と一息吐いて満足気な表情を浮かべた。

ああ、やはり女の子はこうじゃなくつちやな……。

そんなことを考えたのも束の間。

続くロールちゃんの言葉に、俺は戸惑いを隠せなかった。

「さて、と。一応お約束通り自己紹介してあげるわ。私はマキナ。あなたを創り出したのは私なのよ、主代公人」

テーブルの上のメモ用紙が一枚、床にひらりと舞うのを眺めながら、俺は「え、なんだって」と言った。



「そういうわけで、お爺ちゃんがうるさいから来たのよ……」

まるで大賞を取る気満々で小説を書き新人賞に応募した結果、一次落ちした書き手みたいに、不本意そうな口調だった。

「あんたたちがどうにもならないのは、私の取材不足だろうって」

マキナさま わ 俺の創造主は分かっていない！

著作権者 さん
 メンヘライⅢ

所属サークル きりにじぶんげいしや
 霧虹文芸社

サイトURL <https://kirinijibunko.jimdofree.com>

本サークルでは共に活動する仲間を募集しています。

年齢、性別、居住地、職業等一切不問。

詳しくは上記URLから要項をご確認の上、下記メールアドレスまでご連絡ください。

また、出版社様からのお声かけも随時受付中です。

メールアドレス kirinijibunko@gmail.com

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）
並びに無断複製物の譲渡および配信は、著作権法での例外を
除き禁じられています。

表紙イラスト・挿絵 あすら twitter @Ass_rA_A